【157】

氏　名(本　籍)	内田裕子(熊本県)
学位の種類	博　士(芸術学)
学位記番号	博甲第 1,750 号
学位授与年月日	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	V. ローウェンフェルドの造形教育理論についての研究
主　査	筑波大学助教授　博士(芸術学)　岡崎昭夫
副　査	筑波大学教授　伊藤　鈞
副　査	筑波大学教授　文学博士　相馬　隆
副　査	聖徳大学教授　仲瀬津久

論文の内容の要旨

本論文は，第二次大戦後の世界各国の美術教育の理論と実践に大きな影響を与えたアメリカの美術教育の研究者，ヴィクター・ローウェンフェルド（Viktor Lowenfeld : 1903年～1960年）の造形教育理論についての研究である。

ローウェンフェルドは，オーストリアのリンツに生まれ，ウイーンの専門学校で美術制作を学んだ後，ウイーン大学において美術史と心理学を修めた。彼は，1938年に，ナチスの追害を避けるために，イギリスを経由してアメリカに渡り，1946年にペンシルヴァニア州立大学に招聘され，美術教育の講座を設立した。翌年に彼の出版した著書（Creative and Mental Growth，初版）は，戦後の世界の美術教育で最も影響力のある著作として知られている。我が国でも，その著作の改訂第三版（1957年）が『美術による人間形成』という表題で1963年に翻訳され，その邦訳書は，戦後の美術教育の理論と実践に大いに貢献し，現在においてもなお美術教育の基本図書の一つとなっている。

本論文では，ローウェンフェルドの理論が，絵画や彫刻の美術分野のみならずデザインや工芸までも含む，造形芸術全般を教育内容として取り扱っているので，美術教育という用語ではなく，より広義の「造形教育」という用語が主に採用されている。ローウェンフェルドの造形教育理論の全体を正確に把握することを通して，彼の造形教育観を探究しようとする本論文においては，その研究目的として以下の三つが挙げられている。それらは，第一に，ローウェンフェルドの造形教育理論の全体像を客観的かつ詳細に把握すること，第二に，ローウェンフェルドの造形教育観の本質を明らかにすること，第三に，ローウェンフェルドの造形教育理論が今後の造形教育に対していかなる方向性を示唆するかを突き止めること，である。

こうした三つの研究目的を達成するために，本論文では文献研究の方法が採用されている。著者は，ローウェンフェルドの造形教育理論に関して，主に邦訳のない『ローウェンフェルド講義録』（1982年刊行）を基本資料としつつ，邦訳のあるローウェンフェルドの三冊の著作（『美術による人間形成』，『子どもの絵』，及び，『児童美術と創造性』）を参照し，ローウェンフェルドの『美術による人間形成』の原書を第1版から3版まで綿密に比較対照している。さらに，こうしたローウェンフェルドの全ての著作（原書及び邦訳書）に加えて，彼の主要な諸論文，及び，彼の理論の様々の局面に関係する数多くの日米の文献が本論文において考察の対象となっている。本論文は，これら多数の文献を基礎資料にして研究を進めているが，その研究内容は，序章「本論文の目的

と研究の方法」，第1部ローウェンフェルドの「児童美術の発達段階論」（第Ⅰ～Ⅱ章），第2部ローウェンフェルドの「児童美術の様式論」（第Ⅰ～Ⅲ章），第3部「ローウェンフェルドの造形教育観とその影響」（第Ⅰ～Ⅲ章），終章「ローウェンフェルドの造形教育論の新たな意義」，図版，及び，参考文献，によって構成されている。

まず，序章においては，主に，1958年にペンシルヴァニア州立大学の授業でなされたローウェンフェルド自身による自伝（未公刊）を基礎資料にして，ローウェンフェルドの生涯を詳述した後に，ローウェンフェルドを研究対象とする上述のような研究の目的，方法，内容を提示している。

次に，第1部においては，ローウェンフェルド造形教育理論の全体像を客観的かつ詳細に把握するための第一の試みとして，彼の「児童美術の発達段階論」の背景とその内容とを考察している。第Ⅰ章「発達段階理論の成立」では，今日におけるローウェンフェルドの発達段階理論の評価を示し，特に描画の発達段階に関する現在までの心理学的研究の歴史を概観している。そして，これらの先行研究とローウェンフェルドの児童美術の発達段階理論との関係から，ローウェンフェルドの児童美術の発達段階理論の成立に寄与した諸研究を突き止めることにより，ローウェンフェルドの三冊の著作（原書と邦訳書）と邦訳されていない『ローウェンフェルド講義録』（1982年刊行）とを比較対照することにより，ローウェンフェルドが設定した児童美術の六段階のうち，最後の段階（本論文の第2部において詳述）を除く，五つの発達段階（「なぐり描き」〈2～4歳〉，「図式化前」〈4～7歳〉，「図式化」〈7～9歳〉，「写実傾向の芽生え」〈9～11歳〉，及び「擬似写実的」段階〈11～13歳〉）をそれぞれ考察し，ローウェンフェルドによる発達段階理論の具体的内容を解明している。

さらに，第2部においては，ローウェンフェルドの造形教育理論の全体像を客観的かつ詳細に把握するための第二の試みとして，彼が設定した児童美術の最終の発達段階（「決定の時期」〈13～17歳〉）における「視覚型」と「触覚型」という「児童美術の様式論」を考察している。第Ⅰ章「『視覚型・触覚型』理論の成立」では今日における「視覚型・触覚型」理論の評価を示し，ローウェンフェルドの定義した「視覚型」と「触覚型」に関して検討を加えた後に，「視覚型・触覚型」理論に類似する諸理論を取りあげている。第Ⅱ章「『視覚型・触覚型』理論の歴史的背景」では，リーグルの「視覚的・触覚的」理論，及びベレンソンの「触覚値」理論を問題としている。これら二人の美術史の分野における理論とローウェンフェルドの「視覚型・触覚型」理論との共通点を見出し，「視覚型・触覚型」理論に類似する諸理論の基本的前提となる主観と客観の二元論とそれらの相互作用による統合の根拠を，主にヘルバルトの教育学や美学の観点に求めている。第Ⅲ章「ローウェンフェルドの『視覚型・触覚型』理論の解釈」では，ローウェンフェルドの「視覚型・触覚型」理論をリーグルの「視覚的・触覚的」理論やベレンソンの「触覚値」理論と比較することにより，ローウェンフェルド独自の理論的特徴を抽出している。

第3部においては，ローウェンフェルドの造形教育観の本質を明らかにする試みとして，彼の造形教育観の本質を主として統合と自由という観点から把握し直し，その観点に基づいて，日本の美術教育へのローウェンフェルドの造形教育理論の受容とその影響とを再検討している。第Ⅰ章「ローウェンフェルドの造形教育観」では，「教科の統合」，「統合的製作」，「成長要素の統合」，及び，「経験の統合」という彼の統合の所説をそれぞれ考察し，次に，「自由な表現」と「干渉されない自由」とういう彼の主張が取りあげられ，彼の造形教育における「統合」を行うための「自由」の必要性を強調している。第Ⅱ章「創設期の図画工作科の性質と造形教育観」では，昭和20年代初期に設立された日本の学校教育における図画工作科には戦前における技術主義的な残存が見られることを指摘し，この問題点の克服に対して欧米の児童中心主義的な美術教育理論，特に児童面の発達段階の諸理論が貢献し，技術から創造へという戦後の美術教育理論の転換がなされたことを明らかにしている。第Ⅲ章「日本におけるローウェンフェルド理論の受容」では，そうした創設期の美術教育におけるローウェンフェルドの理論の紹介や翻訳の経緯を，主として「美育文化」と「教育美術」という二つの美術教育の月刊雑誌を基礎資料にして，綿密にあとづけている。さらに，ローウェンフェルドの理論が，美術教育の雑誌を通して，多大の影響を戦後の日本の美術教育の展開に与えたことを実証している。

最後に，終章「ローウェンフェルドの造形教育論の新たな意義」においては，ローウェンフェルド造形教育理論が今後の造形教育に対していかなる方向性を示唆するかを突き止める試みとして，まずローウェンフェルドの造形教育理論に関する今日的な意義を述べ，次に，彼の理論がこれからの日本の美術教育に与える可能性を，手の身体活動による触覚性という観点から，探究している。

審査の結果の要旨

ローウェンフェルドの造形教育理論は，アメリカのみならず世界各国の戦後の美術教育の理論と実践の様々な局面に深く浸透している。特に，彼の提示した子供の造形活動の発達段階，及び「視覚型」と「触覚型」という青年期の造形活動の二つのタイプは，世界の美術教育者の誰もが知らねばならない基本的知識に属している。例えば，日本においても，前述の彼の邦訳書『美術による人間形成』は，イギリス人のリードによる『芸術による教育』(1953年邦訳）とともに，邦訳刊行以来30年以上を経た現在でも，日本の美術教育の分野の基本図書と見なされている。リードとともにローウェンフェルドを知らずして戦後の内外の美術教育の理論を説明しえない状況があるにもかかわらず，ローウェンフェルドの業績全般を対象とする研究は，アメリカにおいても博士論文がわずか二点あるのみで，我が国の美術教育研究の分野においては未だなされてはいない。本論文は我が国では未踏の課題に取り組んだ意欲的なローウェンフェルド研究であり，その点だけを挙げても優れた着眼点をもつ論文と認められる。

この論文の意義としては以下の三つが挙げられよう。まず，第一の意義としては，ローウェンフェルドによる児童の造形活動の発達段階理論が造形教育の実践に対して具体的な方向を示唆するものとして設定されていることを解明した点にある。もともと，子供の描画の発達段階に関する心理学的研究は，過去一世紀以上の歴史を持っているが，そのほとんどの研究成果は，描画の形態の分類を通した発達の段階区分の論議に終始し，造形芸術全般に関して無関心であった。しかるに，ローウェンフェルドは，造形芸術全般の教育実践を前提にして，「なぐり描き」から「擬似写実的段階」に至る児童美術の発達段階理論を形成したことを，主にローウェンフェルドの『美術による人間形成』(原書の第１版から３版）と邦訳のない『ローウェンフェルド講義録』(1982年刊行）とを突き合わせることにより，著者は解明した。

次に，本論文の第二の意義は，ローウェンフェルドの提示した「視覚型」と「触覚型」という青年期の造形活動の二つのタイプの分類概念が，美術史学におけるリーグルの「視覚的・触覚的」理論やベレンソンの「触覚値」理論に由来していることを究明した点である。美術教育の実践において再現的な描写を作品に求めれば作品のもつ想像力が失われるが，このことを危惧したローウェンフェルドは，「決定の時期」において発達段階を児童の気質によって複線化した。これが「視覚型」と「触覚型」であり，前者の外界の客観的描写に向かう再現的気質と，後者の内面の主観的表出にこだわる表現的気質とを区別したのである。これら二つの気質による生徒作品の芸術的価値を等しく認めることで，美術教育の意味が中学校以降の学校教育においても確保されたのは，ローウェンフェルドの大きな功績であった。ローウェンフェルドは，「視覚型」と「触覚型」を提唱するにあたり，双方の弁別テストを考案して，心理学的実験を行った。今日まで美術教育者は，ローウェンフェルドの心理学的な実験結果に目を奪われ，その実証的妥当性を是認するのみで，それら二つの型の分類概念を問題とはしてこなかった。著者は，この問題に対して真正面から取り組み，従来の「視覚型」と「触覚型」という気質による分類概念が，実はリーグルの「視覚的・触覚的」理論やベレンソンの「触覚値」理論の根底に流れる「芸術意志」に由来している，という新しい知見を我が国の美術教育者に初めて提示した。これより，ローウェンフェルドの「視覚型・触覚型」理論には心理学的アプローチを可能にした芸術学的基盤が見出されることから，青年期における美術作品の「写実主義」と「表現主義」とは等しく芸術的価値を有することが容易に理解できるようになる。

最後に本論文の第三の意義としては，ローウェンフェルドの造形教育の理念を児童の心身の成長における「統

合と自由」という観点から考究した点にある。戦後の日本の美術教育は，リードの『芸術による教育』という理念とローウェンフェルドの創造による精神的成長という発達課題とを両軸にして展開してきた。その結果として，リードの芸術教育の理念に関する考察はおびただしい一方で，ローウェンフェルドの造形教育の理念に関する研究はほとんど見当たらない。本論文では，ローウェンフェルドの造形教育の理念を「自由」な環境における造形活動によって「自己同一化」がはかられることで，心身の「統合」が達成されるところに求めている。つまり，ローウェンフェルドの造形教育の理念における「自由」と「統合」とは，造形活動による「自己同一化」を媒介にして，絶えざる循環をなしつつ，さらなる創造性の深求に向かう不可欠の要素であった。しかし，日本では，こうしたローウェンフェルドの造形教育の理念が注目されず，彼の発達段階理論が批判的検討のないままに受容され，さらには，彼の「自由」概念が指導目標のない放任として誤解されたことを，過去半世紀以上の日本の美術教育の文献を基にして，著者は鋭く指摘している。

以上のように，本論文は，ローウェンフェルドの造形教育理論に関して，（1）造形教育の実践に有効な発達段階理論の設定，（2）「視覚型・触覚型」の分類概念の芸術学的基盤，（3）造形活動による「自己同一化」を媒介にした「自由」と「統合」の理念，という三つの新しい解釈を提示することにより，本論文の研究目的の最初の二つ(「ローウェンフェルドの造形教育理論の全体像を客観的かつ詳細に把握すること」及び「ローウェンフェルドの造形教育観の本質を明らかにすること」) はおおむね達成されたと言ってよい。

しかし，本論文の揚げた「ローウェンフェルドの造形教育理論が今後の造形教育に対していかなる方向性を示唆するかを突き止めること」という第三の研究目的の到達にはやや距離があることも否定しがたい。具体的には，本論文におけるローウェンフェルドの造形教育理論の三つの新しい解釈が，今後の造形教育への方向性として著者が挙げる手の身体活動による触覚性と十分に結びつけられていないことから，ローウェンフェルドの造形教育理論と手の身体活動による触覚性との関係がやや曖昧となっている感がある。この点をもう少し踏み込んで考察したならば，本論文は一層説得力に富むものとなったはずである。この点は今後の残された課題として著者によって充足されることを期待したい。

また，本論文に関する問題点も幾つか指摘できる。まず，論文作成上の技術的な問題点として，論文の内容構成が必ずしもバランスがとれているとは言えず，その展開にぎこちなさが残っていること，要約稿の部分がやや目立つこと，一部に翻訳調の文章が残存していること，第1部における発達段階の考察において児童美術の図版の数がきわめて少なく，それぞれの諸段階の理解を難しくしていること，など挙げられる。さらに，論文内容の問題点としては，ローウェンフェルド理論の日本における受容と戦後アメリカ民主主義の受容との関係への考慮が足りないこと，日米両国におけるローウェンフェルド研究の今後の課題が必ずしも明確でないこと，文献研究のみによるローウェンフェルド研究では限界があり現地調査の必要があること，など指摘された。しかしながら，これらの問題点は，本論文が我が国では初めてのローウェンフェルド研究であることを考慮すれば，許容されるべき範囲にあり，今後研究者として長い研鑽を積むことにより改善されるものと思われる。

本論文を全体として評価すれば，ローウェンフェルドの造形教育理論を綿密に研究することを通して，彼の造形教育理論に三つの新しい解釈を提示したことが独自の研究成果であると言える。加えて本論文には，ローウェンフェルドの造形教育理論に関する以下のような基礎的な研究成果も認められる。ローウェンフェルド自身による自伝（未公刊の口述筆記）の新資料を基にしたローウェンフェルドの生涯の詳述は，我が国の今後のローウェンフェルド研究の基本資料の一つとなり得るものであり，また，日本におけるローウェンフェルドの受容に関する多数の資料は，今後の後続研究に資するところ多大である。

本論文は，我が国における今後の本格的なローウェンフェルド研究の先駆けとして，重要な役割を果たすものと予想される。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。